

騙し合う人たち

—ナミビア、ナマのお金を巡る人間関係—

藤田 翔*

2019年1月21日の夕方、お風呂を借りようと滞在先の家の母屋に入った私は、中にいたMから「後でオフィスに来て」と突然言われた。私はこの時ナミビア南部ハーダップ州のアサブ(Asab)という小さな村の、知人に紹介された家に滞在していた。その家には老夫婦と、その子どもであるM(40代の女性)と30代の男性が暮らしていた。Mは、この家で家事や家畜の管理等を取り仕切っていた。また、彼女は食料品等を販売する小さな店ももっていた。私はその店の商品をつけていくつか買っていたため、その支払いをしに、後で彼女の店に行けばいいのかと聞いてみると、「何?ああ、それじゃない」と彼女は否定した。その時は追及してもそれ以上話してくれなかった。つけの清算以外に私に思い付く事は無く、また、彼女はこのような曖昧な形で私に要件を伝えてきた事はそれまで無かった。そもそも、この家に「オフィス」と呼ばれている場所など無いのだ。

お風呂に入った後、彼女が忙しく母屋を出入りしている様子を見て、どこに行けばよいのかもわからない私は、母屋の隣に張っていた自分のテント近くの長椅子に座りながら、彼女に呼ばれるまで独り赤ワインを飲んで待っていた。すると、普段私が寝る準備を始める22時近くになってやっとMが私を呼びに来た。「ミーティングをしよう、『オフィス』で」と、彼女は言った。彼女のシリアスを装ったような様子と、その冗談めかした言葉選びが可笑しくて、私は笑いながら彼女の後をついて母屋の中に入って行った。

母屋のリビングのソファに座りながら彼女が私に話したのは、簡単に言うと「300ナミビアドル¹⁾を貸してほしい」というものだった。この民族集団ナマの共住地域²⁾では、お金の貸借やねだりは日常的に行なわれている。外国人はお金をもっていると考えられているためか、調査地で私も頻繁にお金をねだられていた。しかし、この地域では珍しく、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ナミビアの通貨。1ナミビアドル=約8円。

2) ナミビア南部カラス州とハーダップ州の一部にある、ナマ語話者が多く住む地域。1990年、ナミビアが南アフリカから独立した際、アパルトヘイト期に区分された民族集団ナマの地域(ナマランド)をほぼ踏襲する形で設定された。この地域は貧困率と非就業率が高い。

それまで私にほとんどお金を求めてこなかった彼女のこの時の申し出は、いくらか複雑な事情によるものだったとその理由を聞いてみてわかった。

Mがお金を借りた経緯

Mは以前から、2019年に小学校へ通い始める娘の制服代や学校までの交通費など、娘の進学に伴う費用の工面に気を揉んでいた。彼女が幼馴染の友人男性Aに娘の進学費用の工面に悩んでいる事を伝え、友人Aは「わかった、助けよう」と言い、その援助を申し出た。その時、お金を工面する方法として、彼は売り上げの良いお酒を彼女の店で新たに販売するよう提案してきたという。

実際に、2018年11月からMは自らの店でお酒を販売するようになっていた。自動車を所有している友人Aが、村から100km以上離れた都市部で缶ビール等を数ケース安く仕入れ、Mの家へ運んでいた。同年の10月末からこの家に滞在していた私は、友人Aが銀色のトヨタハイラックスに乗って月に1、2回Mのもとを訪ねてくるのを見ていた。Mの話では、友人Aが2018年12月と2019年1月の月初めに訪ねて来た時、彼はそれぞれ先月分の売上金の確認とその回収をしていた。しかし、その2回とも彼は売上金を総取りし、Mへの分配をしなかったという。売上金の分配割合について2人が最初どのように協議していたのかは不明だが、彼女は、実際に販売の仕事をしているのは彼女であり、最低でも売上金の約1割に当たる800~1,000ナミビアドルは月々与えられ

るべきだと考えていた。

売上金を分配しない事について、Mは彼にその不満を伝えていた。12月、彼女の不満に対して彼は、「妻が遠出をしていて、彼女に仕送りをしなければならぬから今はお金がない。妻が帰って来たらお金を払う」と答えたという。しかし、実際に彼の妻が帰って来ても彼は「お金がない」と言い続け、Mにお金を渡さなかった。また、Mは直接的なお金の分配ではなく「せめて店で売る分のグローサリーを買ってきて欲しい」とも彼に頼んでいた。それに対して彼は、1月半ばに家畜のオークションがあり、そこで彼の家畜が高く売れたら買うと答えた。しかし、オークションが終わると「売値が低くて求めている物は買えなかった」と話し、この彼女の要望にも応えなかったという。

「友人AがMの金策を支援する」という形で始まったお酒の販売で、11月分、12月分と売り上げが友人Aによって総取りされ、自らの要望も聞き入れられなかったMは、彼から分配されるのを待つのではなく、彼を騙し、自分で売り上げの一部を得る事を考えるようになったという。彼女は2月の初めに1月分の売上金の確認・回収に来た彼に、実際よりも少ない嘘の売り上げを報告し、その差額を自ら得る計画を立てていた。

Mの計画と実際に起きた事

私がつけて食料品をMから買っていたように、この地域では、人々が必要な時に十分なお金をもっていない事が多く、年金や給料が入ったら支払うという約束のもと、村の小

さな商店でのつけによる食料品の購入や、個人間で分割払いや後払いによる家畜の購入がしばしば行なわれているようだった。Mは、このつけで販売した分のお酒の売り上げを友人Aに隠して、後で支払われるお金を自ら得ようとしていた。そしてそのために、彼女は1月に入ってから何度か「今月は売れ行きが悪い」と友人Aに嘘を伝えていた。また、2月に彼がお酒の残量を確認する時に備えて、彼以外の人物に、つけで販売した分のお酒の新たな購入と、家までの運搬を依頼していた。

彼女はその計画の中で2人の人物のつけの清算をあてにしていた。ひとり目は彼女の友人女性Bで、もうひとりとは隣村出身の男性Cであった。友人Bは以前にも何度かつけで商品を購入した事があったようで、Mは彼女が月末に給料を得て、これまで必ずつけを清算してきた事を知っていた。そのため、彼女は友人Bによる今月分の支払いを確信していた。しかし、男性Cについてはいささか複雑な状況があり、つけが支払われるかどうか不明であった。そして実際、支払われる約束の日に清算される事はなかった。

その日というのが、彼女が私にお金を借りた日であり、また、つけで販売していた分のお酒を購入しに行く人物が彼女の家を訪れ、その費用を受け取りに来る日であった。Mはその人物に支払う代金の一部を、男性Cのつけの清算によって得られるお金で賄おうと考えていたため、清算されなかった事による不足分を私から借りる事になったのだという。

男性Cのつけとその後の経過

Mの計画の中に私が登場するきっかけを作った男性Cのつけに関しては、Mと友人Aとのやり取りとはまた別の出来事とその背景に存在していた。Mの話では、男性Cのつけは、彼から1頭のヤギを代金後払いで購入していたMのおじが肩代わりしており、そのおじから支払われる約束となっていた。しかしそのヤギは、以下のような事情があり、おじが清算を約束した日の前日に、警察によっておじから没収されてしまったのだという。

Mが彼女の弟、隣に住むいとこ、そして幼馴染の警察官から聞いた話によると、男性Cはある日、どこからか「8頭のロバ」を連れてこの村にやって来た。それらのロバの耳にはタグが付いておらず、所有者が不明であった。男性Cは隣村では家畜泥棒をする男として有名であり、その「8頭のロバ」は彼がどこかで盗んで来たものであろうとの事であった。しかし、男性Cはその内の2頭をMのいとこの家へと連れていき、そこでいとこの家のタグを付けた出処の明らかな2頭のヤギと交換した。そして、Mのおじはそのヤギの内の1頭を男性Cから買っていたのだ。

2019年の2月になり、Mは私が貸したお金を、私のつけの帳消しという形で返済してくれた。そして、彼女は1月分の売り上げの確認に来た友人Aを無事に騙す事が出来たようだった。しかし、その時も不満を伝えた彼女に、友人Aは200ナミビアドルという彼女にとって期待外れの少額を渡して帰っ

たという。さらに、おじが肩代わりした「男性 C のつけ」は、未だ M へ支払われていなかった。

おわりに

これまで、私が M からお金を求められた出来事をきっかけに、その経緯とその後の経過について彼女から聞いた話を記述してきた。その話の中で人々はお互いを騙し合っていたように見える。この地域で生活する中で、私も「騙された」と思うような経験を何度もしてきた。仲良くなったと思った相手が、お金を得ようと嘘を吐いていたと知ると、私はどうしても相手を信頼できなくなり、警戒心からそれまでのように親密には接

する事が出来なくなってしまう。しかし、M は彼女を騙した友人 A について、「これからも友だちである事には変わりはない」とはっきり言い切っていた。さらに、彼との関係を維持しつつ状況を変えるために非常に苦心して計画を練ったと彼女は話していたが、その結果、彼を騙す事を選択していた。彼女のこうした発言や行為は、彼女の中で「騙す（される）事」と「親密性」が共存しうる事を示しているようで、私にとっては驚きであった。ここでみられるような、騙し合いつつ親密性を維持するという関係のあり方について、今後の研究でより深く理解出来れば良いと思っている。

炭を食べるサル

—ザンジバルアカコロブスの採食行動—

野 田 健太郎 *

炭を食べるサル

東アフリカ、タンザニアのザンジバル諸島に生息する霊長類ザンジバルアカコロブス (*Procolobus kirkii*) は、炭を食べる行動が頻繁に観察されている [Struhsaker *et al.* 1997] (写真 1)。

ゾウなどの野生動物が土を食べる行動はこれまでにもたびたび報告されてきた。また他の動物でたまたま炭を口にしたというケースはあったとしても、日常的に炭を採食するという動物は世界を見てもあまり知られていない。

ザンジバルアカコロブスはザンジバル諸島

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科